

## 焼却された日記

### Burnt Diaries

森川俊夫

MORIKAWA Toshio

1933年1月30日ヒトラーが政権の座についてから2週間足らず後の2月10日、トーマス・マンはミュンヘン大学講堂で『リヒャルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大』と題する講演を行った。これはヴァーグナーの没後50年にあたる記念の催しであり、ヴァーグナーとマンとの深い関わりを考えれば、これほど適切な人選は考えられなかったかもしれない。

しかし反面、政権を確保した国民社会主義ドイツ労働党にとって、これは挑発的人選だった。第一次世界大戦中のマンは、民主主義体制の英仏連合国に敵対する帝政ドイツを擁護して、保守層からその精神的支柱のように見られていたが、戦後の1922年、一転して民主主義的ヴァイマル共和国支持を宣言したマンと保守層との間には深い亀裂が生じて、マンはナチ勢力の台頭とともにその主要な攻撃目標の一人になっていたからである。

当日、マンは講演会でとくにヒトラー政権に対して刺激的発言をしたわけではない。しかしミュンヘンのナチ勢力は、この講演に難癖をつける口実に事欠かなかった。講演会が激しい妨害を加えられたばかりではない、2ヶ月後の4月16日には新聞、ラジオを通じて『リヒャルト・ヴァーグナーの市ミュンヘンの抗議』が発表された。マンがドイツの巨匠を歪曲し、貶めたのは許せない、というのである。この声明の署名者にはハンス・クナペルツブシュ、ハンス・プイツナー、リヒャルト・シュトラウスなど、ミュンヘンの知名人が名前を連ねていた。その多くはマンの知友であり、有形無形の圧力に屈した向きもあったかもしれないが、そのことは、『抗議』のインパクトを減殺するというよりも、ナチ政権誕生以後の政治気流の抗いがたい厳しさを裏付けている。事実この『抗議』よりも1ヶ月半以上前には国会放火事件が起こっており、国民社会主義労働者党、ないしその政権は、事件を徹底的に利用して反対派を容赦なく弾圧するのに少し

も躊躇しなかった。

マンは、『ヴァーグナー』講演の翌日の2月11日にアムステルダム、ブリュセル、パリでの講演旅行に出発し、講演の日程が終わった2月26日からスイスのアローザに静養のため滞在していた。その間ドイツ国内の状況は悪化の一途を辿り、結局マンは、そのまま終生ミュンヘンの自宅に戻ることがなかったのだが、当時のマンは、国内情勢がますます悪化してきているのに、なお執拗に帰国の機会をうかがっていた。公然と亡命の意志を表明したのは、講演旅行に出発してから3年も経ってからのことである。

今日からすると、ヒトラー政権下のドイツで生きていく可能性があると考えること自体政治的判断力の甘さを裏付けるように見えるし、亡命の意志表明までの数年間、夫人を含めてマンの家族も煮え切らない家父長の態度に批判的だったのは事実である。マンが、ただちにヒトラー政権と絶縁しなかった理由は単純ではないが、しかしヒトラー政権の本質の理解が甘く、その非人間的体質をその総量において認識していなかったのは否定出来ない。たとえばアナーキストのエーリヒ・ミューザームは、国会放火事件の翌日2月28日に逮捕され、約1年半後の1934年7月10日強制収容所で虐殺されている。マンが帰国した場合ミューザームと同じ運命に襲われる可能性は非常に高かったが、その頃のマンは事態をそれほど深刻に捉えていなかった。しかしナチズムの体質を知り尽くしていたかにも見えるミューザームも、国内に残って戦い続ける決心をしたのは、ナチ政権の本質とその恐ろしさを、やはり過小評価していたからではないか。結局ヒトラー政権とその統治下のドイツに対するマンの状況判断の誤りは、むしろ当時一般的なもので、とくにマンに固有のものではなかったのだ。

国境は閉鎖されていなかった。マンの子供たちはほとんど自由に出入国を繰り返しているし、マンにしても、知人たちから帰国を見合わせるようにとの忠告を受けてはいたものの、身の危険の心配が杞憂に終わる可能性も考えていた。いずれにもせよ、マンは2月11日の出発の時点ではもちろん、亡命の意志などまったくなかったのである。

亡命を考えていなかったことを裏付けるのが、若い頃から書き溜めた日記冊子である。もっとも、その記述内容によって裏付けられるわけではない。これらの日記はすでに焼却されている。これは、マンにとって二度目の日記焼却だった。

いつの頃から定かではないが、マンは若い頃から日記を書き続けていた。しかし1896年2月17日以前のある日、それまで書き溜めた日記を焼却した。20歳の時である。それから約一ヶ月後のある手紙にはまた「ぼくはこの数日、日記を書く以外の仕事はしていない……………」とある。1933年2月11日の時点で問題になる日記冊子というのは、この1896年3月以来36年分の日記のことである。

この日記をふだんトーマス・マンは鍵付きの戸棚にしまいこみ、旅行に出る時もその鍵は肌身放さなかった。これは、家族の誰にも覗かせないための処置だった。2月11日の出発にあたっては鍵は携行した。これは、マンにとって習慣化した用心であるが、帰国を前提とした行動である。亡命を企図していたとすれば、家族にも見せられない日記は、もちろん他人の目にも触れないよう、何らかの形で処分したはずである。

記入中の日記冊子は、旅行の際にかならず携行する習慣だったとはいえない。しかし携行しなかった場合、あるいは病後など、数日分を纏めて記入した。いわば日記はマンにとって情熱であり、生活の不可欠の一部だった。したがって出国以来1ヶ月以上を経た3月15日に新しい冊子を用意して日記を付け始めたのは、むしろ遅きに過ぎた位であった。

マンの日記は一日分の分量が平均的に非常に多いが、再開初日3月15日は記入量が特に多く、印刷されて107行、翻訳して400字詰め原稿用紙 7.5枚強である。

この分量の多さに不思議はない。3月15日前の10日間ほどの体調について詳細に記述したり、13日に到着した娘エーリカの報告について触れたりしているからである。ただ後の日記に見られるように、記入出来なかった日の分を日を追って書き継いでいくという書き方ではない。あくまでも、中断していた日記を改めて書き始め、この日に関わる過去の事実を補足するという書き方である。しかしそれにもかかわらずここではおよそ日記に関しては、中断のことも再開についてもまったく触れていない。余人ならいざ知らず、饒舌なマンのこの沈黙はきわめて異様である。

「昨夜は、ニーキシユ夫妻に教えてもらった副作用のないカルシウム剤のおかげで、意外なほどぐっすり眠れた」という再開初日の日記の冒頭は、一ヶ月以上に及ぶ異例の中断などまるでなかったかのような印象を与える。日記について触れたり仄めかしたりするきっかけがなかったとはいえない。娘エーリカがミュンヘンの家から『ヨゼフ物語』第三巻の原稿と資料も持ちだして来てくれた」とを記しているからで、残してきた日記冊子についてここで触れても不思議はない。いやむしろ触れない方が不自然だし、ことさらに言及を避けているかのようである。

いずれにせよ、ミュンヘンの自宅はまだ接收されたわけではなかった。そこでマン夫妻はエーリカなどをまじえて協議の結果、当面夫人がミュンヘンに戻って、状況の変化に対応する態勢を整えることにする。この方針が記された後、「苛立ちと不安、それに心配が、またしても頭をもたげる」というくだりでこの日の記述は終わる。この段落最後の一行は、協議の際に覚えた「苛立ちと不安」を述べたとも受け取れるが、少なくともここで「またしても頭をもたげ」てきた「心配」は、協議の内容と直接の関わりがない。

家族にも見せられない日記を人手に渡さないためにも、マン夫人が家を掌握していなければならぬ。しかしその日記を完全に確保するには夫人の助力が必要だが、夫人にも事情は打ち明けられない。とすれば、夫人の帰宅は「最大の」関心事の解決に資することがない。日記を収めた鍵付き戸棚はどうなるか。しかも鍵は自分が持っている……

深刻な協議によって決めたことでも、マンはその結論にあまり固執しない。翌3月16日には夫人の帰国をあっさり延期してしまう。日記の問題の解決に資することのない決定に未練はないかのようである。

日記記入を再開してから5日目の3月19日に、「古い日記」のことが初めて言及される、「なぜか当初からいちばん気にかかっていた古い日記や書類のことが、いまではかなり心配になってきた。——」おそらくこれでもかなり控え目な言い方であろう。「古い日記」のことは自分の新しい日記の中で触れることも憚られる位の気掛かりだったのだ。この頃身体の不調を訴える記述が繰り返されているが、自宅に残された「古い日記」の消息についての不安と連動している。

次男のゴーロはずっとドイツ国内にいて、3月20日にはミュンヘンに家を借りる。4月1日、ドイツから出国するには「政治的潔白」の証明書が必要になる。しかし役所自体がこの手続きをまだ知らないで、ゴーロとメーディ（三女）は許可証をもたずに4月2日出国し、ルガーノの両親のもとで復活祭を祝う。6日ゴーロはミュンヘンに戻る。ところが、その2日後の4月8日、マンは「朝食後、ゴーロにあて、イギリス製引き出しおよび書物机から取り出して送ってもらいたい書類や品物のことで詳細かつ綿密な手紙を書く。鍵もゴーロに送付」と書いている。ゴーロ宛ての手紙には「中身を読まないよう、お前の良識をあてにしている」とある。ルガーノ滞在中のゴーロに直接頼めば簡単だったのと思えるが、ゴーロが出発した翌日の7日になって、

反政府派分子の監視、家宅捜索が予想されるという報道が伝えられ、「古い日記のことで、新たな不安が起こる。どうしても安全な場所に移す必要がある。」そこで8日の手紙になったのである。事情が許せばゴーロにも頼みたくはなかったのだ。

10日にゴーロは「古い日記」を小型トランクに収めて父親宛てに発送する。正確に言えばマン家のお抱え運転手ハンス・ホルツナーがゴーロに代わって発送を引き受けたのである。

次に日記の中で「古い日記」について触れられているのは、ゴーロがこれを発送してから2週間後の4月24日である。「書類の入った小型トランクが長いこと届かないのが不安である。」その間4月14日にゴーロは父親のもとにやってきて、16日にはまたミュンヘンに戻っている。その時にマンがゴーロとトランクのことで話し合った形跡はない。

ゴーロが戻って行った6日には、例の「ヴァーグナーの市ミュンヘンの抗議」が報道される。4月26日、自家用車3台が政治警察に「確保」されたと電話で知らせてきたゴーロに、マンは翌27日ミュンヘン脱出を促す。この頃ようやく運転手のハンス・ホルツナーが政治警察のスパイであることがわかってくる。マン夫妻は、29日ボーデン湖畔のロールシャハ（スイス）でゴーロに再会し、ミュンヘンの弁護士ハインスをまじえて今後の対策を協議し、公然たる対決姿勢、すなわち「亡命」を表明することは避けて、順次、穏便に財産を取り戻す方法をとることにする。

4月30日付けの日記は、行方不明の「古い日記」が致命的な意味を持ち得ることを初めて明らかにしている、「…………トランクの探索は、ハインスと、その弁護士事務所の協同経営者の手で続行。その結果は、火曜日〔5月1日〕にバーゼルへの電話で報告してもらえるという。いまの私の、一番のと言うか、ほとんど唯一のと言っていい心配は、私の生涯の秘密に向けられた今回のこの陰謀だ。この秘密は重く深い。恐ろしいこと、いやそれどころか致命的な事態が起こるかもしれない。」つまり「古い日記」は触れることも憚られるほど気掛かりな問題であり、そこには「生涯の秘密」が盛られていたのだ。

5月2日ハインス弁護士からの電話で、トランクはすでにスイスのどこかにあるはずと知らせてくる。マンは、トランクにまつわる危険など「どうやら一瞬たりとも実在しなかった」かのようによに安堵するが、5月4日、ハインスは電話で、トランクが4日間にわたる努力の結果、政治警察の手から返還され、ルガーノへ運送中、と知らせてくる。この二度の電話の内容にはやや整合性が欠けているが、マンはとくに疑念を覚えた様子はない。

ともあれ問題のトランクはルガーノから回送されて、南仏バンドルに滞在中のマンのもとにようやく5月19日に届く。翌5月20日以降このトランクが取り戻された経緯はもちろん、その中身についても、まるで何もなかったように日記には触れられていない。「古い日記」がマンの体調を崩す原因になることもなくなる。むしろこれを読み返しては回想に耽ることがあり、そのことを折々の日記に記している。

「古い日記」は1938年マンとともにアメリカに渡り、西海岸のロサンゼルス近郊まで運ばれ、その一部は43年から書き始められた長篇小説『ファウストゥス博士』の資料として利用される。

しかしドイツの降伏からちょうど2週間後の1945年5月21日の日記に「以前から考えていた企画を実行に移して古い日記を処分。屋外の炉で焼却する」とある。「古い日記」が無事に手元に戻ってからはほぼ12年後のことである。この処分をマンに決意させたのは、日記に盛られていた「生涯の秘密」、すなわち同性愛体験の記録であったと思われる。「古い日記」にその事実が盛られていたことは、残された1933年3月15日以降の日記によって確認出来る。しかし、結局そうした手掛かりを残すのであれば、なぜ「古い日記」を処分したのか。他に処分の動機があったのか。他

の動機となると「古い日記」が焼却されてしまったため、もはや確認の手掛かりはない。

なお、マンは1922年の講演の中で人間の愛の姿として同性愛を高く位置付けているが、この理想は日常の次元では背徳にほかならず、もし日記に盛られた事実がナチ当局の目に触れることになれば、マンの社会的生命は抹殺されたはずで、「古い日記」が確保されるまでのマンの不安は充分理解出来る。西ドイツで同性愛が刑法上の犯罪でなくなったのは1973年のことである。

〔資料〕 Thomas Mann, Tagebücher 1933-1934, 1935-1936, 1940-1943, 1944-1946.

上記を含めたマン日記の全容については『トーマス・マン日記。1935-36』（紀伊國屋書店）の「あとがき」を参照されたい。（一橋大学法学部教授）